

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：32415

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14422

研究課題名（和文）ポップカルチャーを活用した心理支援モデルの構築

研究課題名（英文）Developing a Psychological Support Model utilising Pop culture

研究代表者

笹倉 尚子 (SASAKURA, Shoko)

十文字学園女子大学・教育人文学部・准教授

研究者番号：00800913

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、カウンセラーが心理支援のなかでゲームやアニメといったポップカルチャーをどのように活用しているのかを明らかにすることを目的として実施された。まず98名のカウンセラーを対象にしたアンケート調査からは、ほぼすべてのカウンセラーが心理支援でポップカルチャーの話題に遭遇した経験があることが示された。そしてそれらを関係づくりやクライアント理解、リソースの拡大へと活用しようとする姿勢が見出された。次に20名のカウンセラーを対象としたインタビュー調査からは、ポップカルチャーの話題に表現されたクライアントの理解について、関係者とのコンサルテーションに用いるなどの具体的で多彩な活用方法が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ポップカルチャーを心の支援に活用することは可能なのか。可能ならどのような活用方法が存在するのか。現代日本において、ゲームやアニメといったポップカルチャーは娯楽とみなされ、それらの話題は「雑談」として括られがちである。しかしながら、一部のカウンセラーはポップカルチャーの話題を「関係づくり」や「クライアントの理解」、「リソースの拡大」、さらには「関係者とのコンサルテーション」にまで活用していることが明らかとなった。好きなものの話題を自由に話せる安心感は、次第に自分自身への洞察や苦悩の語りへと発展する可能性をも秘めている。これは現代の若者への心理支援のあり方を更新する研究結果であると言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to determine how counselors use pop culture, such as video games and anime, for psychological support. First, 98 counselors were surveyed. The results showed that almost all counselors had experience communicating about pop culture in psychological support. They used them to form rapport, understand clients, and expand client resources. Next, 20 counselors were interviewed; analysis of the interviews using M-GTA revealed that counselors used the assessments they understood from their clients' pop culture narratives in their consultations with other supporters. Thus, the results showed that pop culture can be used in various ways in psychological support.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理臨床 思春期・青年期 ポップカルチャー サブカルチャー 漫画・アニメ・ゲーム カウンセリング プレイセラピー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ポップカルチャーは若者の精神的健康に寄与するのか。もし寄与するならば、それはいかにして可能になるのか。ポップカルチャーと精神的健康のあいだには複雑な関係が存在する。日本のゲームやアニメ、マンガ、芸能等のエンターテインメントが社会的評価を高めている一方で、世界保健機構（WHO）が「ゲーム障害」を疾病として認定するなど、ポップカルチャーが一部の消費者にもたらす負の側面についても注目が集まっている。

一方で、クライアント（相談者・心理支援の利用者）の趣味の話題に着目し、心理支援に活用する動き自体は比較的古くからある（山中,1978 他）。これまでもカウンセラーがクライアントの語る趣味の話題に関心を示すことで信頼関係を築くことや、そうした話題に同調し語り合うことの意義は強調されてきた。近年では「サブカルチャーを積極的に扱うことの治療的意味」（松本,2017）や、「学生相談における趣味の話題に関する一考察」（笹倉,2018）など、心理支援におけるポップカルチャー（サブカルチャー）を主題として扱う研究も現れ始めた。

海外でも同様に、Rubin ら（2008）が、文学・漫画・音楽・映画・ゲーム・アニメ・スポーツといった様々なポップカルチャーをカウンセリングや心理療法に取り入れた事例について紹介している。彼らは、ポップカルチャーは子どもや大人にとって複雑な問題に対処するための貴重な治療資源であるとして、それらを既存のカウンセリングや心理療法に統合する意義や方法論を提唱している。例として、ポップカルチャーの内容についてカウンセラーとクライアントが議論を交わすことが治療的にはたらいた事例などを提示している。ただし、これらの研究に共通しているのは、ほとんどが個別的な事例研究の域に留まっているということである。

その背景として、以下のような理由が考えられる。一つは、心理支援とは問題や症状に焦点をあてその解決や回復を図るものという意識が根強く、ポップカルチャーの話題は「雑談」の類と見なされ積極的にとりあげる向きがなかったこと、もう一つは、ポップカルチャーへの傾倒は「ゲーム障害」に代表されるような精神・行動上の問題につながるというネガティブなイメージから、心理支援の資源として着目されづかったことがあげられる。

申請者はこれまで、思春期・青年期のクライアントがポップカルチャーについて語るという現象について理解を深め、それらを臨床実践に活用するため、調査研究と事例研究を行ってきた。一連の研究の中で、申請者は大学生が漫画やアニメについて語る「語り方」のプロセスを明らかにするとともに、そうした行為の背景にある心理についても 2 つのカテゴリーを抽出している（笹倉,2010a, 笹倉,2010b 他）。さらに調査研究の結果を援用した学生相談の臨床実践を行い、個別的な事例研究によってそうしたアプローチの有効性の検証を続けている（笹倉,2018 他）。

2. 研究の目的

本研究では、個別的な事例研究によって見出された知見を補完し発展させるために、調査研究を行う。具体的には、思春期・青年期の心理支援において、カウンセラーがクライアントによるポップカルチャーの話題をどのように扱うことが有効な心理支援につながるのかを明らかにするため、カウンセラーの「聴き方」に着目し、解明することを目的とする。

そのため、ポップカルチャーを活用した心理支援について、以下の 2 点について量的研究と質的研究という 2 つの調査研究を実施する。その結果と先行研究による個別的な事例研究の知見と統合することによって、一般性や普遍性を持ったモデルを構築することを目指す。

（1）カウンセラーはポップカルチャーの話題をどのように扱っているのか

カウンセラーがポップカルチャーの話題をどのように扱い、心理支援へと活用しているのか、カウンセラーを対象とした調査研究を通してその具体的なプロセスを明らかにする。

（2）ポップカルチャーを活用した心理支援とはどのようなものか

1 で得られた知見と先行研究、およびこれまで申請者が行ってきた研究とを照合することによって、ポップカルチャーを活用した心理支援モデルを構築する。

3. 研究の方法

（1）量的研究：アンケート調査の方法と対象

全国の学生相談機関・教育相談機関に依頼状を送付し、調査協力に同意したカウンセラーにオンラインの質問紙調査へ回答してもらった。

・調査時期：2020 年 6 月～7 月、2020 年 8 月～10 月の 2 回実施。

- ・調査協力者：思春期や青年期を対象とした心理支援の経験があるカウンセラー98名、平均年齢42.55歳($SD=10.15$)。
 - ・質問項目は予備調査(笹倉,2020)をもとに作成した。
- 質問項目の前半は、年齢や性別等の属性を選択する質問に加え、心理支援の場面でポップカルチャーの話題を聞いた経験の有無、聞いた内容(ジャンル等)を問う項目を設定した。質問項目の後半は、心理支援の場面でポップカルチャーの話題をどのように捉えているか、体験や態度について尋ねる20項目を設定し、5件法での回答を求めた。

(2) 質的研究：インタビュー調査の方法と対象

量的研究において「インタビュー調査に協力する」と回答した協力者にコンタクトをとり、調査協力に同意したカウンセラーにオンラインでのインタビュー調査に参加してもらった。

- ・調査時期：2021年5月～2021年12月
 - ・調査協力者：思春期や青年期を対象とした心理支援の経験があるカウンセラー20名(21名にインタビュー調査を行ったが、思春期の支援経験のないカウンセラー1名を対象から除外した)。平均年齢36.35歳($SD=7.47$)、平均臨床歴9.95年($SD=6.66$)。
- インタビューの内容は、(1) 普段の心理支援においてポップカルチャーの話題をどのように扱っているか、(2) ポップカルチャーの話題を扱ったケースで印象的なものについて詳細なプロセスを語ってもらう、という2段階を設定した。分析には修正版グラウンデッドアプローチ(木下, 2003)を用いた。

4. 研究成果

(1) 量的研究：アンケート調査の結果と考察

心理支援の場面でクライアントからポップカルチャーの話題を聞いたことがあるかという問いに対し、「非常によくある(49%)」「しばしばある(26%)」という回答が多かった。「ときどきある(23%)」を合わせると、98%の協力者がそうした話題が生じる状況を経験していた。

また話題の内容(複数選択可)はアニメ(77)、ゲーム(76)、漫画(46)、インターネット(23)といったものが主であった。

次に、ポップカルチャーの話題をどのようにとらえているかについてのアンケート結果について、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。スクリープロットの固有値の変動状況に基づき、4因子が最適解と判断した。因子負荷量が.40に満たない2項目を削除し、再度因子分析を行った結果、4因子が抽出された。本研究は尺度作成を目的としないため、複数の項目で.30以上に負荷した2項目(Q15、Q16)は残した。

因子1は、クライアントの語るポップカルチャーを詳しく知ろうとする項目と、それらをクライアントの理解や見立てに活かそうとする項目で構成されたため、「クライアント理解の視点と姿勢」と名付けた。

因子2は、カウンセラーがポップカルチャーに関連した自らの感想や経験等を伝えることに関する項目で構成されたため、「自己開示」と名付けた。

因子3は、ポップカルチャーの話題を臨床実践で扱い、その有効性を実感している項目で構成されたため、「活用の手ごたえ」と名付けた。

因子4は、ポップカルチャーの話題がクライアントの主訴や病理等の問題を覆い隠す可能性を示唆した項目で構成されたため、「支援を妨げる懸念」と名付けた。

因子1「クライアント理解の視点と姿勢」と因子3「活用の手ごたえ」の間に正の相関がみられた。

4因子の因子得点を用いて、クラスター分析(平方ユークリッド距離、Ward法)を行った。その結果、3クラスターが妥当と考えられた。クラスターごとの特徴を捉えるため、得られた3クラスターを独立変数、因子得点を従属変数として1要因分散分析を行った。

その結果、すべてのクラスター間で有意差が認められた。Tukey法による多重比較を行った結果、「自己開示」ではクラスター1と3の間で、それ以外ではすべてのクラスター間に有意差が認められた。

クラスター分析の結果からは、ポップカルチャーの話題を扱う際のカウンセラーの体験、態度の傾向は3つに分けられた。

クラスター1：活用群は「クライアント理解」「活用の手ごたえ」がいずれも他のグループより高く、心理支援におけるポップカルチャーの話題の活用に積極的で、その有効性を強く実感しているカウンセラーたちである。

彼らはそうした話題が支援を妨げるとはあまり感じておらず、自己開示に関しても消極群よりは多く行う傾向にある。クライアントにとって、ポップカルチャーの話題に明らかな興味・関心を示し、また積極的に反応を返すカウンセラーの対応は、それまでクライアントが体験してき

た関係のパターンとは異なる、新たな大人との関係を生み出す可能性がある。今回の調査では、こうした体験・態度をしているカウンセラーが多数派であった。本研究のテーマに関心を持ち、参加しようとするカウンセラーという偏りがあった可能性は否めない。ただし、現代の心理支援においてポップカルチャーの話題を活用しようとする姿勢は珍しいものではないのだろう。

クラスター2：慎重群は「クライエント理解」「自己開示」「活用の手ごたえ」が平均値（＝0）に近く、心理支援におけるポップカルチャーの話題について、まったく活用しないわけではないが、「支援を妨げる懸念」が特に強いカウンセラーたちである。平均値（＝0）に近いという結果は、「どちらでもない」というよりも、「ポップカルチャーの話題が活用できるときもあれば、そうでないときもある」「一概には言えない」といったケースバイケースの姿勢を反映しているのではないかと推測される。

このグループは、心理支援においてポップカルチャーの話題を扱う際に、何らかの失敗体験、具体的には「その話題ばかりになる」「主訴が扱いづらくなる」など、うまくいかなかった経験をしている可能性が高い。このグループがもう一つの多数派であったことを鑑みると、ポップカルチャーの話題が場合によっては支援を妨げる可能性には留意することが必要だろう。

クラスター3：消極群は「クライエント理解」「自己開示」「活用の手ごたえ」が低く、ポップカルチャーの話題からクライエントを理解しようとする態度や、有効性の実感が薄いカウンセラーたちである。

カウンセラー自身がそうした話題に「あまり詳しくない」「聞いても分からない」という自覚があるがゆえに、ポップカルチャーの話題に対し特に反応しないグループなのではないかと推測される。おそらくは活用の機会自体が少ない（ない）ため、それらが支援を妨げるという実感もあまり強くないものと考えられる。

活用群と慎重群のあいだでは「支援を妨げる懸念」の開きが最も大きい。心理支援においてポップカルチャーの話題を活用するにあたっては、そうした話題を扱うことが主訴を扱いづらくさせたり、問題を見えにくくさせることについて、どのように認識しているかが鍵となると推測される。こういった点をインタビュー調査を通じて明らかにすることにより、ポップカルチャーを心理支援に活用するためのより具体的な方法が浮かび上がるのではないかと考えられる。

（2）質的研究：インタビュー調査の結果と考察

インタビューデータを修正版グラウンデッドアプローチで分析した結果、「ポップカルチャーを活用した心理支援のプロセス」について、20 の概念、9 つのカテゴリーが見出された（表1）。

ストーリーラインとしては、以下のような流れが見出された。まず、カウンセラーはクライエントに好きなものを尋ねたり、彼・彼女らが身につけているグッズに言及したりすることで、「つながり」、すなわち信頼関係（ラポール）をつくろうとする。あえて保護者にそうした話題に理解のあるカウンセラーであることを伝えてもらう場合もある。そのときのクライエントの反応次第で、話が通じる相手であると示したり、積極的に質問をしたり、あるいは逆に半歩下がって聞くといった態度をとる。そのようにして、クライエントとのほどよい距離感を探るのである。

またカウンセラーの多くが、面接外でクライエントの語ったポップカルチャーを調べていた。さらには「iPad を面接室に持ち込み、一緒に動画を見ている」「面接室にテレビゲームがあり、一緒にプレイしている」といった体験を語るカウンセラーもあり、いずれもそうした行為によってクライエントとのやりとりがスムーズになったと語っていた。このように動画やゲームなどのポップカルチャーがカウンセラーとのあいだで直接共有されることで、コミュニケーションが促進される場合もあるのである。

カウンセラーはクライエントが語るポップカルチャーの内容から、彼らの内面を理解しようとする。そうしたカウンセラーの受容的な関わりは、クライエントに「受け入れられている」という安心感をもたらす。「自分の好きなものの話に真剣に耳を傾け、理解しようとしてくれる大人がいる」ということ自体が、クライエントをエンパワメントするのである。その結果、クライエントはポップカルチャーと絡めて自分の体験を語り始める、あるいは直接に自分自身の苦悩について語るができるようになるのである。

ポップカルチャーを活用した心理支援は面接室内だけに留まらない。スクールカウンセラーや教育センター、児童相談所等のカウンセラーは、ポップカルチャーの話題に際してクライエントが見せた普段と異なる様子から彼らの能力や心理状態を見立て、教員や施設職員といった他職種に新たな視点を示し、情報共有するなど、コンサルテーションにも用いているのである。

また量的調査において、活用群と慎重群とのあいだで差が開いた「支援を妨げる懸念」に関しては、慎重群のカウンセラーのインタビュー調査時にやはり「その（ポップカルチャーの）話ばかりになる」という問題が語られた。同時に、「そうなった場合は時間を区切っている」「面接の構造を仕切り直すことをクライエントと共有した」という具体的な解決策も、活用群のカウンセラーから示された。これはポップカルチャーを心理支援に活用するか逡巡する慎重群のカウンセラーにとって、参考になるものと考えられる。

(3) 研究成果のまとめと今後の展望

本研究の調査を通じて、ポップカルチャーを活用した心理支援について、カウンセラーの「聴き方」のプロセスが実証的に示された。クライアントの好むポップカルチャーの話題をカウンセラーが積極的にとりあげるにより、信頼関係が形成される。さらに、話題となったコンテンツを二人で共有することが関係を深めること、それがクライアントの緊張を緩め、安心できる場を作ることにつながるということが明らかとなった。また、そのような安心感のある場が作られることで、心理支援の場がクライアントにとって「話せる場になる」ことも示された。支援を妨げる懸念に対しても、一定の対策が示された。

本研究を通じて、これまでは個別的な事例研究を通して示されてきた、クライアントによるポップカルチャーの話題をカウンセラーが扱う有用性が実証的に明らかにされるとともに、それらを心理支援に活かす「聴き方」のモデルが具体的に示されたと考えられる。心理支援においてこうした「聴き方」を実践し、その効果を再度検証しつつ、教育や福祉といった周辺領域にも本研究の結果を応用していくことが今後の課題である。

表 1. ポップカルチャーを活用した心理支援のプロセスのカテゴリー・概念・具体例

カテゴリー	概念	具体例
つながりのきっかけをつくる	会話のきっかけ	"好きなものは何?"と尋ねる、それをきっかけに話が弾む。
	グッズやイラストへの言及	スマホカバーから"ゴジラ好きなん?"って聞いたり。
	保護者を介してつながる	本人がゲーム好きと聞き「カウンセラーがゲームの話を知りたいと言っている」と保護者に伝えてもらった。
ほどよい距離感を探る	通じる人間だと示す	こちらが知っていることを示すと親しみをもってもらえる。
	積極的に尋ねる	積極的に質問をしたり、具体的なところを確認していく。
	一線を画す	侵襲的にならないように、抵抗を感じたら聞きすぎない。
共有する	面接外で調べる	"次までに見ておくね"と伝えて実際シリーズ通してみたり。
	面接内で一緒に見る・やる	ブレイルームにテレビゲームがあることで、子どもがそれをやりながらしゃべってくれる。
クライアント理解に活かす	アセスメントを行う	その子がどのくらい説明できるか、説明力を見ている。
	内面の状態と重ねて聴く	どんなところに惹かれたのかなというところから、その人の体験世界が少しずつ見えてくる部分があるかなと思ったり。
	リソースの探索	楽しいことをリソースとして使いたいと思っている。
安心できる場をつくる	場の緊張感をゆるめる	他のことでは発言が少ない子ども、生き生きとする。場をゆるめるために使っているのかもしれない。
	気持ちを落ち着かせる	教室を飛び出したりとか、緊張感のある場面でそういう話題を出すことで、雰囲気を変えることができる。
	攻撃性の受け皿	ファンタジーという安全な形で攻撃性を出せる。
話せる場になる	わかってくれる大人の存在	ゲームのこと話せる大人がいなくて、好きな話ができたというのが本当に嬉しかったみたい。
	自分の話になってくる	趣味の話に終始していたのが、時間が経つと、自分とキャラクターを比較して自分の話を始めたりする。
	しんどい話が出てくる	頑なに不登校の理由を話さなかった小が、好きなものについて話した後でそうした話題を語り出すこともあった。
コンサルテーションへの活用	コンサルテーションへの活用	印象との違い、本人の良いところ、こういう力があるんだというのを見出して、先生方へのコンサルテーションに使う。
その話ばかりになる	その話ばかりになる	趣味の話が世間話に終始してしまうようなことも起こる。
面接を構造化する	面接を構造化する	前半は好きな話、後半は学校の話、と区切るようにした。

引用文献

- ①木下康仁(2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- ②Rubin,C.L.,(2008) *Popular Culture in counseling, psychotherapy, and play-based interventions*. Springer publishing Company.
- ③松本寿也(2017) サブカルチャーを積極的に扱うことの治療的意味: 伊藤・鈴木・家次論文に対するコメント. 日本精神分析的な心理療法フォーラム,5,pp.71-73.
- ④笹倉尚子(2010a) 漫画やアニメについて他者に語るプロセス. 心理臨床学研究,28(1), pp.16-27.
- ⑤笹倉尚子(2010b) 漫画やアニメについて他者に語るプロセス--他者に語る行為の背景について. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, pp.195-207.
- ⑥笹倉尚子(2018) 学生相談における趣味の話題に関する一考察―発達障害学生によるゲームの話題に着目して―. 学生相談研究,39(1),pp.14-24. (査読有)
- ⑦笹倉尚子(2020) ポップカルチャーの話題を活用した心理支援―心理臨床家へのアンケートの分析から―. 日本心理臨床学会第39回大会(論文集461)(オンライン開催)
- ⑧山中康裕(1978) 思春期内閉―治療実践からみた内閉神経症(いわゆる学校恐怖症)の精神病理―. 中井久夫・山中康裕編 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社, pp.17-62.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 笹倉尚子	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 推しのいる生活	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 心理臨床の広場	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 笹倉尚子	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 2019年度・2020年度における学生相談界の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学生相談研究	6. 最初と最後の頁 138-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 笹倉尚子	4. 巻 48(1)
2. 論文標題 思春期の異界とサブカルチャー触媒、あるいは器として 思春期女子の事例ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 笹倉尚子	4. 巻 1
2. 論文標題 ポップカルチャーを心理支援に活用する方法の検討ーカウンセラーへのアンケート調査からー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 県立広島大学大学教育実践センター紀要	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 笹倉尚子	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 学生相談において趣味の話題を扱うプロセスに関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学生相談研究	6. 最初と最後の頁 107-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 笹倉尚子	4. 巻 16
2. 論文標題 三好論文へのコメントー「好きなもの」で近づくことと、隔てられるものー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 72-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 笹倉尚子，植田峰悠，長行司研太，高井彩名，太田裕一，岩宮恵子
2. 発表標題 心理臨床とサブカルチャー7
3. 学会等名 日本心理臨床学会第41回大会自主シンポジウム(論文集370)(オンライン開催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹倉尚子
2. 発表標題 ポップカルチャーを活用した心理支援を構成する要素ーセラピストの体験・態度の因子分析的検討ー
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会ポスター発表(オンライン開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笹倉尚子, 岩城晶子, 大島崇徳, 徳山朋恵, 太田裕一
2. 発表標題 心理臨床とサブカルチャー 6
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会自主シンポジウム(オンライン開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笹倉尚子
2. 発表標題 若者文化を学生相談に活かす
3. 学会等名 第59回全国学生相談研修会小講義（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笹倉尚子
2. 発表標題 ポップカルチャーの話題を活用した心理支援—心理臨床家へのアンケートの分析から—
3. 学会等名 日本心理臨床学会第39回大会(オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笹倉尚子
2. 発表標題 思春期・青年期事例における「好きなもの」の話題の意義—事例のメタ分析を通じた支援モデルの探索—
3. 学会等名 日本学生相談学会第37回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹倉尚子
2. 発表標題 オフラインでつながる意味
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会自主シンポジウム「サブカルチャーと心理臨床5」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 笹倉 尚子、荒井 久美子、岩城 晶子、植田 峰悠、大島 崇徳、片岡 彩、高井 彩名、田中 智之、長行司 研太、徳山 朋恵、藤田 恵津子、三田村 恵	4. 発行年 2023年
2. 出版社 木立の文庫	5. 総ページ数 384
3. 書名 サブカルチャーのころ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

笹倉尚子（2019）書評：東畑開人『居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書』精神療法,45(5),pp.121.

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------